



絶えず

自分の目標

見失わず

猛練習を開始していましたが、全部員が重量級の選手層の薄さを感じていました。そこで当時の関二郎監督は、中大バスケット部と自衛隊体育学校のレスリング班に何度なく足を運び、時には翌年の主将に決まった私も同行、関係者を説得し、晴れて鶴田の希望であった中大レスリング部への移籍が実現いたしました。

レスリング部の合宿所生活は早朝ランニング、夕方レスリング、夜ウエイトトレーニングと、汗で濡れた練習着が乾く間もないくらいハードなものでした。そのころから鶴田と私は五輪候補選手に選ばれ、全日本の合宿にも参加し、365日練習づくしの毎日が続いていました。ウエイトの階級が違っていました。ともに重量級なのでお互いが練習相手になり、さらに練習時間以外にも一緒に

ジャンボ鶴田の思い出

中大OB

鎌田 誠

文京区富坂の中央大学理工学部キャンパスにあったレスリング道場で、体育の授業を受けていた鶴田を見て、とにかくドデカイ奴だと思いつつ声を掛けたのが、彼との最初の出会でした。

お互い1年生。彼は当時、中大バスケット部に在籍していました。お互い「レスリングをやってみよう」と、胸のうちを明かしてくれました。しかし、レスリング部への移籍は簡単にはいかず、バスケット部を退部した後、朝霞にある自衛隊体育学校レスリング班に顔を出し、コーチであった佐々木龍雄さんの指導を受けていました。鶴田は体力づくりを中心に、レスリングの練習を重ねた結果、一般の選手として大会にも出場するようになりました。3年生のころになって再会したときは、バスケット選手の面影はなく、体格も秀逸な格闘選手のものになりました。

中大レスリング部は、この年ブロックの準優勝で悔し涙をのみました。秋からは翌年の大学対抗リーグ戦で7年ぶりの優勝を目指し、

が多かったように思います。とくに外での食事は一緒のことが多く、鶴田が見つけたライスのおかわり自由という店で、腹一杯食べたものでした。鶴田の口癖の「腹減った、腹減った」を聞いたバナマから来ていたレスリング留学生・オメルド君は、鶴田に「ハラヘツタさん」とのニックネームをつけたこともありました。酒を飲み誘っても、ほとんど行くことはなく、一人で本を読み、好きな音楽を聴いている時間が、けっこう好きでした。鶴田は3年間、木村業をやっていた練馬区の親戚でアルバイトをやりながら学費をつくり、学業とレスリングに打ち込んでいました。

鶴田はマイペースなところもありましたが、真面目な苦学生で、こつこつと実力を身につけ、将来に備えているようでした。そのころ彼は「自分が体が大きいから普通のサラリーマンには向かない。プロレスラーになるつもりだ」と、打ち明けてくれました。そのためにアマレスでオリンピックに出場して、華々しくプロレスにデビューしたい、と人生目標を語ってくれました。

4年生になった昭和47年には学生運動も落ちつき、キャンパス内は平穏を取り戻していましたが、中大レスリング部は優勝を目指し正月から質・量ともに一段と厳しい練習をこなしていました。

5月の末、神宮の青山体育館でリーグ戦が開催され、中大はAブロック初戦で拓大にまさかの1敗を喫し、皆ショックで呆然となりました。しかし、1敗して気が楽になったのが、その後の早大、日大、慶大、日体大を難なく破り、Aブロックで優勝しました。

1週間後に早稲田の体育館で、Bブロック優勝の国士館大学を相手に、リーグ戦の優勝戦を行いました。国士館大学は初優勝をかけた正規の応援団も動員するなど、気合は十分でした。団体戦は軽量級から順番に9階級試合が進められ、8番目の私と9番目の鶴田の出番の時は、両試合とも判定勝ちでは足りず、いずれもホール勝ちしなければ、総合ポイントで優勝できない状態にまで追い込まれた。

私の相手は1年生で、すぐにホール勝ちできましたが、鶴田の相手は主将で、判定負けでも団体として勝てるので、逃げ回る試合展開となりましたが、鶴田は最後の最後で相手を捕まえ、ホール勝ちに追い込んでくれました。この頃から鶴田は「見せ場を作る」プロレスラーの素質があったのではないかと思います。

試合後、すぐに鶴田のもとへ駆け寄り、抱き合って喜んでいたら、自然に涙があふれてきたのを覚えています。それから1か月後に全日本選手権、兼オリンピック最終選考会が茨城県笠間市の市民体育館で開催され、鶴田と私はそれぞれのクラスで優勝して、ミュンヘンオリンピックへの切符を手に入れました。

卒業後、鶴田は全日本プロレスに入社して、半年間のアメリカ修行に行きました。帰国すると、4年間で卒業できずにいた私の、池袋の下宿によく遊びにきてくれました。

【鎌田 誠氏】北海道出身。中大理工学部卒。高校時代からレスリングを始め、70年のカナダの世界選手権で銅メダルを獲得、72年のミュンヘン五輪、74年テヘランのアジア大会など、鶴田選手とともに世界を舞台に活躍。現在、(有)かまた屋代表取締役、岩見沢市市会議員。北海道レスリング協会副会長を務める。49歳。



ミュンヘン五輪選手村で(右が筆者)

下宿の大家さんは、鶴田が泊まると寝返りの音が大きく響くから、すぐわかるというて笑い、まだ無名の鶴田が泊まりにくるたびに、必ず差し入れをしてくれました。嫌みのない素直な性格の鶴田は、周りの人から好かれていました。

活躍したプロレスを引退する時、鶴田は横浜の自宅に私に「これからは大学の教授を目指して頑張る」といっていました。自分の目標を明確にして、いかなる時も自分を見失わず、地道に努力を重ねてきた彼の生き方は、スポーツマンそのものであり、私の心のなかで、いつも輝いていました。

次なる目標のために受けた手術の最中、「ご家族が予想もしなかった悲しい結果となりました。周りの方以上に、あの世に行った本人が驚いたことでしょう。志半ばで逝った鶴田は、さぞや悔しい気持ちでいっぱいだったと思います。

あくまでも前向きに生きたスポーツマンの友人、鶴田友美君のご冥福を心からお祈り申し上げます。

(2000年6月12日、北海道岩見沢市の自宅で)